

骨折のその後

あかたにけいこ
赤谷慶子

六本木の往來にて三月十五日に骨折し、その四週間後不自由の上なきギブスを多少なりとゆるやかならしめんとて、整體師に依頼せり。ギブスは比較的腫れたままはめられたり。そは仕事上スーツ着用するため、醫師に依頼し薄めに作らん儀を依頼せり。四週間経ち腫れも引きギブスは緩みたりき。従ひて、短く切りそろふるうちにすっぱ抜けたり。これ幸ひと、吾喜ぶ。されど、整體師はプロのスポーツ選手日本代表等の怪我管理も擔當してあり、夜間就眠時等意識失いたる状況下にも骨折局部悪化回避のため、我がために簡易ギブスを製作せられたり。加へて、運轉および愛犬散歩など、万が一左手首に負擔かかる事態の出来せんことに備へて、強力なるサポーターも提供せられたり。

骨折より六週間経ち、醫師の検査受けんがため北里研究所病院に赴けり。前任の擔當醫は研修期間終了に付き、北里大學病院へ歸任し、新米研修醫に検査託せられたり。まず診察前にレントゲン撮影の豫定入りたれど、初診當初CTならざれば骨折箇所見えざりし事もあり、不要ならざるかと看護師に傳へ、診察を待つ。順番到來し、すでにギブス取り外し我に醫師は説明を要求。冒頭ギブス通常より薄く作られしは、何故と聞かれ、仕事上スーツ着用必須の事、また英譯の仕事につき、PC操作の要あり等々説明す。醫師はレントゲン撮影を首くと能はず、前回CTのみにての診断能はざりしにも関わらず、レントゲン撮影要求す。レントゲンの寫真出來上がり、再び診察室へ入れば霧のかかりたる寫真にて、いづこにヒビ入りておるかも分ならず。されど若き醫師は「骨ずれたるにあらざれば憂慮するの要なし」といふ。當初よりずれてをらぬは承知の上、ここもとはヒビの接着具合等を知りたし。何とも後味の悪しき診断なりき。

若き醫師は「本來はあとひと月ギブスにて固定するが定石と言ひはる。仕事上手を使ふ能はざれば難澁すといふ事情を鑑みてギブスは斷念せり。しかれども、轉倒して手首をつき、あるいは、重き物品を持つなどしてずるることあらんには手術必須なり。良いですね、私はお傳へしましたからね。」と幾度も「威嚇」す。氣功仲間の醫師達に話しを聞かせしは「醫者は若ければ、患者に迫力ありとみて、舐められてはならじと威嚇するは當然」なりといふ。されど、霧のかかりたるやうなレントゲン寫真にて診断され、少なくとも順調に骨繋がりたるなど、現在の状態詳細説明聞くを欲するなり。診察室出でんとするに「ひと月後に必ず診察に來らせたまへ」と醫者は念を押したり。